

卷頭言

岩手医科大学歯学会二十周年を迎えて

石川 富士郎

昭和40年(1965年)4月、東北北海道地域に初めての歯科医師の養成機関が誕生した。わが岩手医科大学歯学部がその責を担うこととなった。

東京以西にのみ片寄った本邦の歯科大学(歯学部)の存在からわが歯学部の設置は、単に、歯科医師の教育に係ることだけでなく、大学の存在が歯科医学の研究発展、歯科医療の実践、中でも専門分化された歯科専門医療の充実など、学内的なことだけでなく地域一般社会における歯科医学・歯科医療の認識の啓蒙や向上へと、その波及効果は極めて大きい。この地に前例がない故に、わが歯学部は、ただ中央における学体系をそのまま引っ提げて、各専門学科が自己の学問領域のみで、ともすれば井の中の蛙的になってしまう個々の学問を戒めなければならない。ましてや学部創設時の数多い医、歯学系先輩大学で育った教員の混成集団ともいえる私たちが、学術の語り合いを通して、本学の「地域性を担う良医の養成」という建学の精神に一日も早く馴染まなければならない命運があったといえよう。

昭和41年(1966年)4月、岩手医科大学歯学部で培われた歯科医学の研究、歯科医療の実績をお互いが、まずは気楽に討論し、明日の学問向上の糧を見出し、教養課程を修了して進学してくる歯学生の教育体制の構築を計るために歯学談話会が発足した。本記念総索引号にも、取って巻末にその生い立ちと、学会に発展解消されるまでの歯学談話会第1回から第72回の例会記事を掲載した。

昭和50年(1975年)11月、歯学部開設10年の歴史を踏まえて、歯学部関係者がより学術の研鑽を求めるべく「岩手医科大学歯学会」を発足させた。大学に籍を置くものは勿論のこと、歯学部卒業生、すでに歯科医療の実践医の方々も加わって、臨学一体の学会が歩み出した。特に、大学そして大学人が教育は当然のこと、研究に、臨床に、さらには行政にと役割を担う立場から、学内に学術団体をもつことの意義は誠に大きいものがある。ここに、会員の切磋琢磨の場が生まれたわけである。年々学会事業が充実して、総会、例会をとおしての学術発表、機関誌「岩手医科大学歯学雑誌」の刊行による研究成果の公表となった。この総索引号から、その足跡を知り得よう。すでに本歯学会は、学術会議から学術団体として認められ、各期における学術会議会員の推薦母体ともなっている。また機関誌は郵政省から第三種の定期学術刊行物としても認められている。また、昭和58年(1984年)4月の岩手医科大学大学院歯学研究科の開設を得て、本学会は数多い研究者の発表の場の提供だけでなく、本学会の機関誌は本学歯学研究科の学位審査報告を掲載公表する義務を担うまでに至った。

この歯学会20周年を迎えるに当たり、記念事業の一つ「岩手医科大学歯学雑誌総索引号」が刊行出来ることは、会員各位の日頃の大学人、或いは臨床医家としての努力の結果にほかならない。このひとつの節目を大切に、今後学会員それぞれが本学会の目的にむかって、さらなる精進と頑張りを期待するものである。

(本学会 副会長)